わんりぃ

260 号
2021/1

日中文化交流市民サークル'わんりぃ'
町田市三輪緑山 2-18-19　寺西方
〒195-0055　☎：044-986-4195
http://wanli-san.com/
E メール:t_taizan@yahoo.co.jp

真冬の街角で中国将棋を楽しむ人々：とある青空市場のワンシーン。青空市場と言っても道路ぎわの歩道が行商の売り場に占拠された場所に過ぎない。地場の農産品を売りに来る人が多いが、中国将棋を楽しむ人たちも街角に居た。当日は最低気温がマイナス 11 度だった。将棋にそそぐ情熱はどんな寒さにも勝つのだ。
（中国遼寧省瀋陽市　20017 年 1 月　日中水墨協会会長=満 柏）

'わんりぃ' 2021 年 1 月号の目次は 20 ページにあります

「寺子屋・四字成語」雑感-39

hòu　lái　jū　shàng

后・来・居・上

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から

文と訳・有為楠君代（ういくす）

汲黯（きゅうあん）は、漢の武帝の時代の役人で、一本気で正義感にあふれ、思ったことを正直に言う人でした。ある時、朝廷で汲黯は武帝の言葉に反論しました。それ以後、彼の役職が昇進することはありませんでした。

ある日汲黯が武帝に向かって言いました。「陛下が群臣を任用する仕方は、薪を積み上げているようなもので、後から来たものがどんどん上になりますね。」それを聞くと武帝は機嫌を悪くして言いました。「人間はどんどん学んで、賢くなっていくものではないかね。汲黯の言うことなど聞いていたら、私が行きたい道からどんどんそれてしまう。」武帝は、以前汲黯が自分の意見に反対したので、それ以後彼の考えは一切取り合わないことにしたのでした。汲黯は、人材を抜擢する時は年功序列で行うべきで、後輩が先輩を追い抜いて出世するのは良くないと考えるのでした。これはまた、ずいぶん狭い考え方ですね。

挿絵：満伯画伯

・➢・➢・➢・➢・➢・

言葉の意味：后来居上＝後から来る人が上に来る、後ろからきて追い越して行く。

使用例：努力を積み重ね、勉強の方法を工夫さえすれば、だれでも先に行く人を追い越して上に行くことが出来る。

・➢・➢・➢・➢・➢・

以上が、この本に載っているお話なのですが、これでは漢の武帝は大臣の諫言を聞かない皇帝で、汲黯は後輩の出世を妬む老人のように聞こえてしまい、事実とは異なりますが、子供向けのお話でもあり、仕方がないのでしょうか。教える時には、先生からそれなりの補足がなされるのでしょう。

実際には、武帝は時に汲黯の諫言を不快に感じ左遷することがあっても、基本的には、汲黯を「社稷の臣（国家の存亡を担う重臣）」として遇していました。

汲黯は史記や漢書にも出てくる立派な大臣で、何もしないで国を治める、無為が最上の策とする黄老の思想を信奉していました。黄老思想とは、中国の神話で国の基礎を築いたとされる 5 人の皇帝の初めに挙げられる黄帝と老子を師とする思想です。

列伝によると、ある時、地方で千戸もの住宅が消失する火災が発生したのと報告に、皇帝は汲黯を派遣して状況把握と住民の救済を命じました。汲黯は、「火災は、民家が密集していたために多くの住戸が被害にあっただけで、何の援助もいりません。それより、火災現場へ行く途中に干ばつで飢饉に陥っていた地域があり、こちらの方が深刻だったので、皇帝より付与された権限を流用して、朝廷の穀物倉庫を開放し人々に食料を配給しました。権限を流用した罪を罰してください」と報告しましたが、武帝はその判断を的確と認めて、罰するどころか大いにほめたたえました。

汲黯が「後から来たものが上の位につく」と文句を言ったのは、皇帝におもねり、間違ったことを間違いだと指摘しない大臣が出世することに異を唱えたのです。しかしこの状態は、汲黯の時代から 2000 年以上経った現代の日本でも同じような状況が続いていて、昨今はお役人が大臣の気持ちを忖度して仕事をすることがまかり通っています。昔ならともかく、今は主権在民、国民が税金で彼らの給料を払っているのに。

日译诗词［漢詩の日本語訳］（9）

『詩経』国風・関雎

桜美林大学名誉教授　　植田渥雄

『詩経』は周代に歌われた歌曲を集めたもので、中国最古の詩集と言われています。その内容は、風（「国風」＝各地の民謡）、雅（「大雅」「小雅」＝宮廷で演奏される雅楽）、頌（天子や君主の先祖を祀る歌）の三種に分かれています。現存しているものは 305 首。当時の音楽は失われていて、現在伝わる音楽は明清時代に新たに作られたものです。孔子はその音楽と歌詞の内容を「思い邪無し」と高く評価し、弟子たちへの教育の糧にしていました。後に儒教の経典（「五経」＝詩、書、礼、易、春秋）の第一に挙げられました。最初は『詩』または『詩三百』と呼ばれていましたが、後に『詩経』と呼ばれるようになりました。

今回取りあげたのは『詩経』冒頭の一首「関雎」です。「周南」は『詩経』国風の篇名。周南とは都周辺の地域を表わすものと思われます。この詩には古来さまざまな解釈がありますが、若い男女が互いに理想の伴侶を求め合う姿を詠ったものと見るのが妥当なようです。孔子はこの一首を「楽しみて淫せず、哀しみて傷らず」と評しています。

アサザ（ウィキペディアから）

〔訓読〕

関雎

詩経〔周南〕

関関たる雎鳩は　河の洲に在り
窈窕たる淑女は　君子の好逑なり
参差たる荇菜は　左右之を流む
窈窕たる淑女は　寤寐之を求む
之を求むるも得ず　寤寐思服す
悠なり悠なり　輾轉反側す
参差たる荇菜は　左右之を采る
窈窕たる淑女は　琴瑟之を友とす
参差たる荇菜は　左右之を芼ぶ
窈窕たる淑女は　鐘鼓之を樂しむ

〔語釈〕

＊**関関**＝鳥の鳴き声を表わす擬声語。＊**雎鳩**＝主に魚を捕食する猛禽類の一種。ミサゴ。鴛鴦と同様、夫婦仲が良いことで知られる。英名オスプレイ。＊**窈窕**＝女性の美しさの形容。＊**淑女**＝しとやかな女性。＊**君子**＝立派な男子。＊**好逑**＝良き連れ合い。理想のカップル。＊**参差**＝大小不そろいな様。ここでは水草の多様に萌え出る状態を表している。＊**荇菜**＝食用になる水草の一種。アサザ。＊**流**＝求む。採取する。＊**寤寐**＝覚めることと眠ること。寝ても覚めても＊**思服**＝思い焦がれる。＊**悠哉**＝遠い、または長い。「哉」は詠嘆を表わす語気詞。＊**輾轉反側**＝何度も寝返りを打って寝つかれない。＊**采**＝採る。＊**芼**＝選び取る。＊**鐘鼓**＝鉦や太鼓

〔原詩〕

guān jū
关 雎

shī jīng zhōunán
诗 经〔周 南〕

guān guān jū jiū zài hé zhī zhōu
关 关 雎 鸠， 在 河 之 洲

yǎo tiǎo shū nǚ jūn zǐ hǎo qiú
窈 窕 淑 女， 君 子 好 逑

cēn cī xìng cài zuǒ yòu liú zhī
参 差 荇 菜， 左 右 流 之

yǎo tiǎo shū nǚ wù mèi qiú zhī
窈 窕 淑 女， 寤 寐 求 之

qiú zhī bù dé wù mèi sī fú
求 之 不 得， 寤 寐 思 服

yōu zāi yōu zāi zhǎn zhuǎn fǎn cè
悠 哉 悠 哉， 辗 转 反 侧

cēn cī xìng cài zuǒ yòu liú zhī
参 差 荇 菜， 左 右 流 之

yǎo tiǎo shū nǚ qín sè yǒu zhī
窈 窕 淑 女， 琴 瑟 友 之

cēn cī xìng cài zuǒ yòu liú zhī
参 差 荇 菜， 左 右 流 之

yǎo tiǎo shū nǚ zhōng gǔ lè zhī
窈 窕 淑 女， 钟 鼓 乐 之

〔訳〕

ミサゴはキョンキョン鳴き交わす。
河の中洲に睦まじく。
汚れなき彼の乙女子は、
賢き男子に嫁がばや。
アサザは水面に萌え出でて、
右に左にこれを摘む。
汚れなき彼の乙女子を、
朝な夕なに求むれど、
得るにすべなし只ひとり、
朝な夕なに思うのみ。
夜の長きを果てしなく、
褥に転びつ身を焦がす。
アサザは水面に萌え出でて、
右に左にこれを採り、
汚れなき彼の乙女子と、
琴瑟奏でつ親しまん。
アサザは水面に萌え出でて、
右に左に選り求め、
汚れなき彼の乙女子と、
鉦鼓鳴らしつ楽しまん。

ミサゴ（鳥の図鑑ネットから）

国主李煜の『相見歓』

報告：花岡風子

今回のお題は南唐最後の国主李煜の『相見歓』という〈詞〉二首でした。「相見歓」は楽曲の名称（詞牌）であって作品の題名ではありません。李煜の作品はすべて固有の題名がついていないので、多くの場合、題名の代わりに出だしの一句をとって呼ばれます。その例に従えばこの作品の呼び名は『無言独上西楼』（言無く独り西楼に上る）となります。

さて南唐という国と、その国の君主李煜は日本人には一般に知られていませんが、中国人では知らない人がいないほど有名です。テレサ・テンがこれらの作品に素敵なメロディーをつけて歌っていますので、中国好きの日本人の間では知る人ぞ知る存在と言えます。

私も実は李煜の詩は大好きで、特に今回の『相見歓』は『独上西楼』（独り西楼に上る）という曲名で、私のカラオケの十八番でもあるので、いつにも増して耳をダンボに植田先生の解説に聞き入りました。

南唐は、日本の歴史文化にも大きな影響をあたえた唐王朝が 907 年に滅亡したあと、宋王朝が確立する約半世紀にわたる混乱期（五代十国時代）に、南方の長江流域に誕生した地方政権の一つでした。首都は金陵、今の南京で、李煜の祖父李昪が 937 年に唐の皇族の末裔と称して唐を建国しました。しかし「唐」王朝とは縁もゆかりもなかったので、後世「南唐」と呼ばれています。二代目の李璟は、文才に秀で、10 歳で詩を吟じたそうです。隠遁を希望したものの、父の後を継いで即位。『応天長』『望遠行』（いずれも詞牌名）等、〈詞〉がまだ文学的に認められていない頃に優れた作品を残しました。

今回の主人公李煜は、李璟の 6 番目の王子で、父親以上に文才豊かな人でした。本来帝位継承からは遠かったものの、兄 5 人が早世してしまったため父の後を継ぎました。「この人は皇帝なんかになりたくないと言いながら、仕方なく皇帝になった人なんですが、中国史に残る第一級のダメ君主でしたね。徹頭徹尾政治には無頓着で、歌舞音曲に浸り続けました」と植田先生。さらに、妻と共に唐代の名曲の復元に熱中したり、古今の書画をコレクションしたり、名工に文房具を作らせたりすることに情熱を燃やした文化人でもあったようです。特に〈詞〉の分野で多くのすぐれた作品を残し、父の代ではまだ遊興のひとつとされていたこの分野を芸術の領域まで高めたことで知られています。

さて、乱世の時代に王子として生まれた李煜、王様になった最初の頃はよかったものの、ほどなくして国が傾き、遊興に耽るうちに宋の軍隊に攻め込まれ、宋の都に幽閉されてしまいます。3 年間の軟禁生活を送った後、41 歳の誕生日祝いの酒に毒を盛られて殺されてしまうという悲劇の人生でした。「我々は皇帝になって栄華を尽くしたこともなければ、皇帝から引きずり降ろされ、拉致されるということもないですしね。普通はお殿様の悩みなんか分からん、というところですが、彼の詩を鑑賞すると、不思議と何とも言えない人生の味わいを共感できるんですよね。いわば天性のナルシストなんだけれど、人の心を捉える不思議な魅力を持った人物と言えますね」と植田先生。

では、そんな李煜の作品を見てみましょう。

xiāng jiàn huān
相 见 欢

lǐ yù
李 煜

wú yán dú shàng xī lóu
无 言 独 上 西 楼
yuè rú gōu
月 如 钩
jì mò wú tóng shēn yuàn
寂 寞 梧 桐 深 院
suǒ qīng qiū
锁 清 秋
jiǎn bù duàn
剪 不 断
lǐ hái luàn
理 还 乱
shì lí chóu
是 离 愁
bié shì yī bān zī wèi
别 是 一 般 滋 味
zài xīn tóu
在 心 头

げん な せい ろう のぼ
言無く西楼に上れば
つき かぎ ごと
月は鈎の如し
せきばく ご とう しん いん
寂寞たり梧桐の深院
せいしゅう とざ
清秋を鎖す
き た
剪れども断たれず
おさ ま みだ
理むれども還た乱る
こ り しゅう
是れ離愁
べつ こ いっぱん じ み
別に是れ一般の滋味
しん とう あ
心頭に在り

西楼の「西」に格別の意味があるわけではありませんが、「西」は五行思想では「秋」を表します。「秋」は実りの季節であると同時に農耕中心の漢民族にとっては、異民族に収穫を奪われる季節でもあることから「厳しさ」「戦争」「刑罰」という凄惨なイメージを持つ季節です。したがって時は秋、囚われの身の作者にとって「西楼」の二字は作品全体のイメージにぴったり合致します。

たった一人黙りこくって寂しい西の楼に上れば、空には三日月がかかっているという寂しい光景です。爽やかな季節でもありますが、寂寞とした庭には梧桐（アオギリ）が生い茂り、秋の気配を中に閉ざし込んでいます。「鎖」とは閉ざすという意味で、「鎖清秋」はひっそりとした大きな邸宅を表すのによく使われる表現です。

次々と湧いてくる想いを断ち切ろうにも断ち切れない、乱れる気持ちを収めようとしても、また乱れてしまう…。これが別れの悲しさというものか。「離愁」とは、故郷から引き離された悲しみの気持ちを表しています。

「別是」は「別有」とテレサ・テンが歌っていますが、そのほかに何かがあるということです。ここでの「一般」は日本語や現代中国語で言う「一般」の意味ではなく「一つの」という数量詞で「別有一般滋味」とは「何とも言えない、ある種の想いが心にある」というわけです。なおテレサ・テンはここのところを「一番(fān)滋味」と歌っています。現代中国語としてはこちらの方が通じやすいようです。

「滋味」と表現された「言葉にならない想い」というのが意味深いですね。恐らく、若く楽しかったころの甘い想い出もあるのでしょう。ただ悲しい、とだけでは言い切れない複雑な想い、ということでしょうか。

お殿様、お姫様の暮らしを体験したことはありませんが、華やかで賑わいに満ちた宮廷生活から一転して、話し相手もいない軟禁生活を強いられたなら、どれほど心寂しいかは想像がつきますね。寝ている間に、昔の宮廷生活の夢を見たりして、朝目覚めたら「あれ？ ここはどこだ？ 我が宮中じゃないのか！」と落胆することもあったのではないでしょうか。

「この人はね、人を恨んだり、憎んだりできないんですよ。ひらすら我が身を嘆き、みじめな自分

をここまで斬新に美しくイメージできるのは、やはり才能ですね」と植田先生。先生のおっしゃる通り、李煜の詩は不思議なほど、恨み憎しみがありません。まるでそんなドロドロした感情を漉しとったかのように感じられます。ふと、李煜という人は、自らの特異な運命を人生のどこかで「逃れられない運命」と深く受け入れていたのではないか、とさえ思えてきました。もしかするとそれは、いやいやながら皇位についた時だったかもしれないし、文学をたしなむ中で、古来伝わる数々の栄枯盛衰の物語のなかに自らの運命を重ねていたのかもしれません。

「滋味」という言葉で表現された複雑な想いとは「とっくに諦めている」気持ちと「それでもあきらめきれない気持ち」の「狭間を行き交う心の揺れ」だとしたら、殿や姫でなくともすべての人間が共感できるのではないでしょうか。

さて、今回の講座の後半で植田先生がおっしゃった一言がとても印象的でした。「われわれ日本人はともすれば中国人のことを力強いが荒っぽく、繊細さに欠けると思いがちですが、中国人にもこういうフィーリングの世界があることや、身分を越えて複雑な感情を共有するという伝統があることをもっと知らなくてはいけないのではないか、と思わせてくれる作品ですね」

確かに日本人からすると、大雑把で大胆で、テンションが高いと見えがちな中国人ですが、普段よく集まってしゃべる分、一人になった時の落ち込みようは日本人の比じゃないということもよく耳にします。日本人には「一人を楽しむ」という文化もありますが、逆に中国人はより孤独に弱いのかもしれません。私も中国人の友人たちがいますが、個人差はあっても、やはり日本人以上に寂しがり屋で、心の繊細さも日本人と全く同じようだと思うことがよくあります。今回は李煜の詩を通して、中国人の心の世界を一緒に鑑賞して頂ければ幸いです。

以下は、植田先生オリジナルの訳です。書き下し文では伝わらない魅力が伝わってきます。

相見歓（そうけんかん）　李煜（りいく）

黙然（もくねん）と
楼に登れば
鈎（かぎ）の如（ごと）、月は掛かりて
侘（わび）しくも、梧桐（ごとう）の庭は
秋の静寂（しじま）に鎖（とざ）されぬ
断（た）つに術（すべ）なく
理（おさ）むるも、また乱（みだ）るるは
別離（べつり）の思い
今宵また、新たな滋味（じみ）の
心（こころ）にぞ在る

講座では、お仲間の方がテレサ・テンの CD を持参してくださり、皆さんでうっとり聞き入りました。また『虞美人』という有名な作品も『幾多愁』（幾多の愁い）という題で歌われていますので、ご興味のある方は YouTube で検索してみて下さい。

テレサ・テン(鄧麗君)の YouTube、獨上西樓から

丑年にちなむ諺とことば

寺西 俊英

新年あけましておめでとうございます。今年は丑年で、十二支の第二、方角では北北東、時刻では午前１時から３時までですね。年の初めに当たり、日本と中国の丑年にまつわる諺やよく使う言葉などを取り上げてみました。日本は、中国の漢字文化をかなり取り入れているので諺では両国で同じものがいくつかありますが、一方それぞれの国の歴史や習慣に基づくものもあり、対比して見てみました。これらを通して丑（牛）の性格や牛に対する中国人のイメージが少し分かるような気がしてきます。

まず諺から見てみましょう。両国共通の諺は、「鶏口牛後」（鶏口となるも牛後となるなかれ）や「割鶏焉用牛刀」（鶏を裂くに焉んぞ牛刀を用いん）などが人口に膾炙しているでしょう。「鶏口牛後」は《戦国策》や《史記》に「寧為鶏口、無為牛後」として出ていますが、意味は読んで字の通りですね。「割鶏焉用牛刀」は元となる故事は《論語》からですが、意味は小事をするのに大人物を用いる必要は無い、ということです。一方日本独自の使い方として、「牛に引かれて善光寺参り」や「草木も眠る丑三つ時」などがありますね。

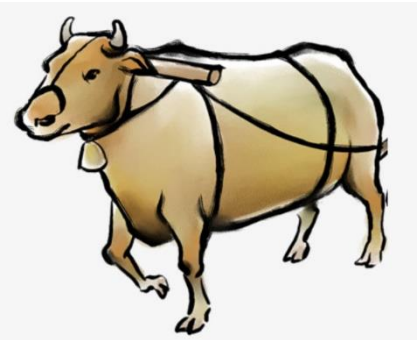
中国独自のものですが、中国人の友人に聞きましたら幾つか教えてくれました。

■牛不喝水、不可強按頭

この諺を直訳すると、「牛が水を飲まないからといって、無理に頭を押し付けるわけにもいかない。」の意味です。要するに誰に対しても物事を無理やりにさせることが出来ないものだと言っています。これと同じ言い方が英語にもありますね。ただし水辺に連れて行くのは牛ではなく、馬ですが・・・。

■做牛馬、牛馬不如

「做牛馬」とは「人のために苦労を共にすること」の喩です。今、中国では殆どの家庭は一人っ子で、自分の子を大事に育て出世させるために「父母給子女做牛馬」（父母は子女のために牛馬のように働き苦労する）ことが多いでしょう。次の「牛馬不如」は「牛や馬にも劣る」という意味を表します。例えば、「過着牛馬不如的生活」は、牛や馬よりも劣る、非常に大変な生活をしていることを表しています。



中国サイト「覓元素」より

■牛郎織女

「牛郎」とは、牧童のことですが「牛郎織女」は牽牛星と織女星をいいます。その二つの星がそれぞれ銀河の両側に住み、毎年の七夕の日に会いますね。年に一回しか会えないので、その日もし雨が降ったら二人は悲しくて泣いていると昔から言い伝えられて来ました。今では夫婦が別々の土地で生活をする喩となります。例えば「過着牛郎織女的生活」は、夫婦が牽牛織女のように別々の所で生活しているとの意味です。これは二人が合わないから別居しているのではなく、勤務地が違うのでやむなく別居していることを強調しています。

次に中国語で牛に関する言葉を紹介しましょう。「牛仔裤」は何のことかお分かりですか？ 答えは「ジーパン」です。「牛仔」はカウボーイのことで、カウボーイがはく裤（ズボン）の意味です。「吹牛（皮）」は、「ほらを吹く」意味になります。牛の性格について、中国語では、牛を頑固で傲慢なものとみなし、「牛脾気」・「牛性」（共に頑固で強情な性格）、「牛气」（生意気である、傲慢である）などの言葉があります。また牛を「強気の代名詞」としての使い方があります。それは「牛市行情」という言葉で、株式市場の急騰する相場を言います。「行情」は、「相場」のことです。語源としては米国の株式相場で強気のことを bull market と言い、弱気相場は bear market と言いますが、それが中国語のイメージと重なって「牛市行情」という言葉になったようです。ですから株式が急落する相場は、「熊市行情」と言います。熊は可哀そうに株式相場では「弱気の代名詞」になったのですね。熊ではなく「狗（犬）」くらいならまだしもです。ちなみに中国人の友人に「太牛啦！（たい・にゅうら）」と言えば、「とてもすごいね！」と褒めているので友人はきっと喜ぶでしょう。

今年は、コロナはいつ頃収束するか分かりませんが、夏の土用の丑の日には、美味しいうなぎでも食べたいものですね。

中国の歴史を彩る美人百花（6）卓文君

寺西俊英

中国四大美女の一人貂蝉（ちょうせん）の代わりに虞美人（ぐびじん）か卓文君（たくぶんくん）を入れるべき、と書いてきたが今回はもう一人の卓文君の登場である。文君は虞美人と同じように生没年は不詳であるが、虞美人と違い氏素性ははっきりしている。前漢（BC206 年～AD８年）の時代を生きた人で、生まれは四川省成都に近い臨邛（りんきょう）という町である。臨邛は現在の邛崍県（きょうらい）（成都の南西約 60km にある県級市）で通商の要地として古くから栄えた街だ。この街には富豪が多く、大邸宅が並んでいた。中でも卓家はけた外れの大金持ちで卓文君はその家の箱入り娘であった。彼女は美しかったが、はねっ返りのおてんば娘で有名であった。

卓文君　清代・赫達資画　台北故宮博物院蔵
（ウィキペディアより）

彼女が 15 歳になった時、臨邛町内で卓家と双璧の大富豪の程家との縁談が進んだ。相手は、程家の次男坊で二郎と言った。家格は申し分ないのであるが彼の性格は内気で病弱であった。おそらく近所の人々はあまりにも性格の違う二人を見て、彼はすぐに文君の尻に敷かれて可哀そうにと噂したのではなかろうか。ただ彼は琴の名手であった。文君も卓家にいた時はたしなむ程度に琴を習っていたが、結婚して彼から手ほどきを受けると琴の腕はめきめき上達して行き、臨邛一の評判をとった。二人の仲は良かったのであるが、結婚して三年後に二郎は病気で亡くなってしまった。子供は出来ず程家との話し合いで、文君は実家に戻ることになった。ここから文君の人生は大きく転変して行く。

卓文君を語るとき、司馬相如（しばそうじょ）抜きにして語れない。司馬相如（BC179～BC117 年）は、前漢の文章家。蜀群成都（漢代の行政区分）の人である。字は長卿、名は犬子と言った。賦（唐詩、宋詞などと並ぶ韻文の文体の一つ）の名人で第７代皇帝の武帝（BC156～BC87 年）に仕え、その才能を高く評価された。彼の家は大富豪ではなかったが地主であり成都では名族の中に入っていた。父はお金を貯めてようやく息子のために中央官庁の下の方の役職を手に入れてやった。長安に向けて旅立つ数日前、卓家の近くに差しかかった時、周辺が騒がしく何事かと声のする方に歩いていった。彼は長安に赴任するとしばらくは故郷には帰れないと思い、あちこちと歩き回っていてたまたま卓家の近くにいたのである。縁というものはどこにあるのか分からないものである。見物人の中に入ると何とそこには輿入れの為、豪邸から文君が出て来たのだ。当時新婦は顔をベールに包み輿入れしたものであったが、文君はベールをせず顔を見物人の方に見せて堂々と輿に乗り込んだのである。期せずして周囲からその美しさにどよめきが起こった。彼はその顔を見て体の中を衝撃が走った。人妻になる人に懸想したのである。彼は数日後旅立ったが長安に行く途中、彼女の玉顔が思い起こされて得意の文章力で何通もの恋文を書いたのであった。これがのちのち役に立つとは本人も想定外であった。

相如は長安で仕事に励んだが時の景帝（第 6 代皇帝、在位 BC157～BC141 年）は文辞に興味がなく、うつうつとしていた時、丁度交流のあった景帝の弟の梁王の家臣から勧められ官職を辞し梁の

国（河南省・開封）に移った。梁の国では文人仲間と交流を楽しんでいた。代表作とも言える《子虚の賦》を書いたのもこの頃である。しかし梁王が若くして死去したので、これを機に長らく留守にしていた成都に戻ったが実家はすでに没落していた。ちょうど古くからの友人である臨邛県の県令であった王吉が臨邛に来るよう勧めたので行くことにした。

一方、この頃実家に戻っていた文君は、琴の腕を買われ時折宴席の次の間で弾くという生活を送っていた。このような時、王吉が臨邛に来た相如に文君が夫と死に別れ実家に戻っていることや臨邛一の琴の名手になっていることなどを話した。相如が文君のことを恋していたことを知っている王吉は、文君との再婚を強く勧めたのである。それを聞いた司馬相如は心が動いたが、叶わぬ恋だとあきらめるしかなかった。ここで王吉と相如は次のようなやり取りをしたと想像したい。

○　　○

相如「いくら再婚とはいえ、卓家の娘を嫁にもらうには莫大な品物が必要だ。我が家は没落してお金は無い。所詮高嶺の花だ！」

王吉「（にやりと笑って）駆け落ちという方法があるじゃないか！」

相如「しかし、私は彼女をちらっと見ただけだし彼女は私のことは全く知らない。どうしようもないじゃないか！」

王吉「私に一計がある。私は県令だ。きっかけなどいくらでも作れるさ。俺に任せろ。」

というような会話があったかどうか知る由もないが、いずれにしても事がうまく運び卓家と程家主催の宴席がしつらえられた。宴たけなわになった時、王吉は「皆様、ここにおられるのは琴の名手であらせられる方だが、是非ご紹介したい」と切り出した。相如は何度か断った後、琴を弾き始めた。（当時は何度か断るのが作法であった）それを文君は隣室で聞いたのである。彼の弾く音色と技巧に文君はすっかり虜になった。その時は何事もなく終わったが数日後、王吉県令は以前相如が都に行く道すがらしたためた何通もの恋文を小者に届けさせたのである。文章の達人が書いたものであるから流石に文君は相如に心を奪われ、二人は世紀の駆け落ちを敢行したのである。

最終的に親は駆け落ちを許し、それからの後日談もあるが、話せば長くなるので今回はこのあたりにしておく。琴の音に関して中国にはいくつかの逸話がある。最後に二つ紹介してこの稿を終わりとしたい。

一つは、知音である。《列子》の湯問篇に出て来る故事である。春秋時代（BC770～BC476 年）に伯牙という琴の名手がいた。彼の琴の音色を本当に理解していたのは友人の鐘子期ただ一人だったという。鐘が亡くなると、「もはや琴を聞かせる人はいない」と言って弦を切り二度と琴を弾くことは無かったという。この故事から「知音」という〈互いに心を知り合った友〉を意味する言葉が生まれた。のち広く知人や恋人なども言うようになった。

もう一つは、次回に登場する美女の蔡文姫である。彼女は後漢から三国時代にかけての詩人であり音楽家であった。彼女は卓文君以上に波乱の人生を送るが、ここでは琴の音色だけに絞って紹介したい。文姫がまだ幼いころ、父の蔡邕が琴の演奏をしていた時、琴の二番目の弦が切れたが別室で聞いていた彼女は、第二弦と言った。蔡邕が不思議に思ってわざと四番目の弦を切ると、またも第四弦と言ったという有名な話が伝わっている。

他にも琴の音色に関する故事が有るが、琴の美しい音色は昔も今も人の心に響き渡り、人生模様を紡ぐ役割をしているのであろう。

なお、司馬相如は《史記》を著した司馬遷（BC145？～BC86 年？）とほぼ同時代の人であるが司馬遷より少し早く生まれたこともあり、史記に記載されている。　（続く）

河南省或いは「中原」雑感―(9)

四字熟語に見える河南

文と写真＝村上直樹

手元に戚建庄著『成語典故与河南名勝』2005 年、河南人民出版社という本がある（以下、『成語与河南』）。今回はこの本の内容を紹介する形で四字熟語に見える河南について綴ることにしたい。『成語与河南』には 71 の成語が収録されており、うち、58 が四字熟語である。このうち、どれを取り上げるかについては、やはり、手元にある、やや以前に出版された真藤建志郎著『「四字熟語」の辞典』1985 年、日本実業出版社（以下、『熟語辞典』）において主見出しとして採用されている 16 語を候補とした。

『熟語辞典』の「凡例〔編集方針〕」にあるように、同辞典の出版当時のみならず、現在でも、一字一字が独立して意味を持つ表意文字（表語文字）としての漢字の特質を生かして、続々と四字からなる言葉が誕生している。しかし、やはり、四字熟語と呼ぶに相応しいのは、長い歴史を持ち、現代社会の言語生活の中で脈々と生き続けて、まさに千古不易の光彩を放っている言葉ということになる。一般には、その背後に物語がほしい。

日本で四字熟語が世間の話題に上るのは、大相撲における大関・横綱への昇進伝達式であろう。最近では、昨年の九月場所（秋場所）後に大関に昇進した正代（しょうだい）が、口上に「至誠一貫」を使った。これは『孟子』離婁（りろう）上にある「至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり」（こちらがこの上もない誠の心を尽くしても、感動しなかったという人にはいまだあったためしがない）を出典とするそうである（「Web 漢文大系」による）。

また、四字熟語については『わんりぃ』誌上でも、現在、その編集の労もとられている有為楠君代氏が長期連載「『寺子屋・四字成語』雑感」として日本人には珍しい言葉を丁寧にわかりやすく紹介されているなど、しばしば取り上げられている。今回は、私のにわか勉強であるが、河南あるいは中原との接点が主題ということでお許し願いたい。

まず、はじめは**酒池肉林**（しゅち にくりん）である。この四字熟語は『史記・殷本紀』を出典とする。『熟語辞典』によると「酒で池をつくり肉を林にかける（原文は“懸肉為林”なので「肉をつるして林とする」くらいではないか）。豪遊をきわめること。野放図で豪奢な遊びをいう。」（ただし、括弧内は引用者）とある。なにしろ、これは殷代の亡国の君・紂王（ちゅうおう）と彼が溺愛した妲己（だっき）の…、と、ここまで書いたところで、『わんりぃ』誌の 12 月号が届き、果たして寺西俊英氏が連載「中国の歴史を彩る美人百花」(5)で酒池肉林を含めて詳しく紹介されていることを知る。そこで、以下、少し省略して、…であるから、仕事で宴会に招待されて「本日は酒池肉林のもてなしをいただき誠にありがとうございます。」とやったら、まとまりかけた商談もご破算必定（ひつじょう）であろう。

ただし、『成語与河南』によると、この酒池肉林は酒や肉が豊富で宴席が豪華であることを指し、必ずしも、悪い意味を含めている場合だけとは限らないようである。これと似た四字熟語に**肉山酒海**があり、たとえば『水滸伝』の 71 回では梁山泊に 108 人の豪傑が勢ぞろいしたところで大宴会となり、“至日，肉山酒海，先行給散馬、歩、水三軍，一応小頭目人等，”（「当日になれば、肉の山・酒の海、まず、騎兵、歩兵、水軍、ありとあらゆる小頭たちに心づけをやり、」日本語訳は吉川幸次郎訳『水滸伝』全 15 冊、岩波文庫、1947 年）と出てくるように、悪い意味はない。酒池肉林も同様の使い方がされるようである。

この四字熟語が殷代を起源としていることから、河南省とは現在の安陽市にある殷墟を通じた関係となる。酒池肉林の現場は跡形もなく消え去っているが、殷墟を訪ねて、婦好（ふこう）の墓から出土した各種の酒器などを見ると、殷朝における統治者の豪奢な生活ぶりを知る

「婦好墓」　（2008 年 3 月撮影）

ことができる。私が殷墟を見学したのは、かなり以前の2008年3月12日（水）のことである。婦好の墓も見学した（写真参照）。現在では観光施設としてさらに整備されているのではないかと思う。

婦好（好が姓であり、子姓に同じ）は中国最初の女性の軍最高司令官であり、傑出した政治家として知られている。商(殷)王武丁（ぶてい）の妻であり（もっとも、武丁には60人以上の妻がいて、その中の筆頭）、殷墟から出てきた甲骨文には周辺諸国に攻め入ったことなどが記録されている。たとえ贅沢をしていたとしても、妲己とは全く違う忠心愛国の人と伝えられている。

次にとりあげるのは、**百家争鳴**（ひゃっかそうめい）である。このよく知られた四字熟語は『熟語辞典』の解説では「文化、芸術、学問上の意見を、学者や文化人がめいめい争って発表するさま。」とされている。周代の統治的な秩序が瓦解した春秋戦国時代という中国社会の一大変革期に、歴史、社会、政治、文化、世界、宇宙を巡って、さまざまな学派が誕生し、独自の見方、主張を展開した状況を指す。いわゆる諸子百家と河南省との関係は深いが、とくに重要なのは老子(道家)との縁であろう。

老子の故郷は、現在の河南省周口市に属する鹿邑県(当時の楚の苦県)である。私が実際、鹿邑県を訪れたのは、これもだいぶ以前の2007年9月13日（木）のことである。残念ながら、ごく短時間の滞在であったため、「太清宮」や「老君台」を見学することはできなかったものの、街なかに立てられた「老子故里」の看板が印象的であった。記念のお土産品として手に入れた、「道可道，非常道；名可名，非常名」で始まる『道徳経』に唐・宋・明・清の皇帝が注釈を付けた『御註道徳経』は大切に保管している（もちろん、読んでも、私にはさっぱり意味はわからない）。

いつもながら少し脇道に逸れるが、同じ周口市には項城市（県級の市）がある。ここは、袁世凱（えんせいがい）の故郷として知られている。私が訪問したのは、2009年11月のことである。このときも、時間が少なく、郊外にある袁世凱の生家を見学することはできなかったが、町の中心部にあり、現在は項城市博物館となっている「袁世凱行宮（あんぐう）」は見学できた。袁世凱は現在では、すこぶる評判の悪い人物であるが、何と言っても地元が生んだ近代史上の重要人物ということで、地元の人々は複雑な思いを抱きつつ復権（再評価）を願っているのではないか。因みに博物館の袁世凱の紹介文には「中国近代史上的一位顕赫人物」という表現が採られていた。

3番目は**陽春白雪**（ようしゅんはくせつ）である。この四字熟語の解釈を巡って、少しおもしろいことに気がついた。まず、『熟語辞典』によると「すぐれた人物の言行には、普通の一般大衆は調子を合わせにくいというたとえ。『陽春白雪、和する者寡し』という。」とあり、『後漢書・周挙伝』を出典としている。この解説文からは、高尚な芸術は庶民感覚から遊離しているといったやや警句的な意味合いが感じられる。

それに対して、『成語与河南』による解説では、この熟語は中国・戦国時代の楚国の高尚(高深)な2つの歌、すなわち「陽春」と「白雪」のことであり、その後、高尚であって通俗的ではない文学芸術を広く指すようになった、とされており、高尚と通俗の対比を意識してはいるものの、より中立的な感じである。

『成語与河南』が原典としているのは楚国の人・宋玉（そうぎょく）が書いた『対楚王問』の中の一部分である。そこでは、「下里」、「巴人」といった当時楚国で流行していた民間歌曲は和する者数千人、それに対して「陽阿」、「薤(植物名)」露（lù）」といった歌曲では和する者、数百人、さらに、「陽春」、「白雪」といった（高尚な）歌曲では、和する者数十人、といったことが書かれている。

微妙な感覚の違いが気になったので、念のため『後漢書・周挙伝』を確認してみると、すぐれた儒家にして官吏であった周挙（しゅうきょ）が、大将軍・梁商（りょうしょう）がおめでたい宴会で「薤露」を吟唱し、参加者が涙したという話を聞いて「これこそ悲哀と歓楽の時宜に適さず、場違いというものだ。災禍がすぐにやってくるだろう。」と嘆き、果たして、まもなく、梁商が亡くなった、ということが書かれている。この「薤露」の内容は、薤の上の露水はすぐに乾いてしまうというもので、人生の短さを描く、挽歌であって、死者への哀悼を表す歌である。

ここでもう一度『対楚王問』に戻ると、「下里」、「巴人」と「陽春」、「白雪」の中間に「陽阿」とともにこの「薤露」が出ている。どこかで、この「薤露」が「陽春」、「白雪」とすり替わってしまったのかもしれない。本来、警句的意味を持つ場合「陽春白雪」ではなく「陽阿薤露」とすべきであったが、後者では言葉としてあま

りにもなじみがないため前者のようになったのではないか。これは、あくまで、私の推測に過ぎない。

陽春白雪の使用例として『成語与河南』では、たとえば『西遊記』の第64回で三蔵法師が木仙庵で詩について談ずる場面で、他の人が作った詩を“真是陽春白雪，浩気冲霄！”（「いや、まったく『陽春白雪』の境地ですなあ。浩気が天に冲するといった感じです。」日本語訳は中野美代子訳『西遊記』(七)、 岩波文庫、1993年）と褒めている箇所を挙げている。

また、『対楚王問』に出てくる「下里」と「巴人」という歌は、「陽春白雪」との対比から、通俗的に普及している文芸作品を指すようになったが、毛沢東も「延安の文芸座談会における講演」（1942年5月）において、“現在是‘陽春白雪’和‘下里巴人’統一的問題，是提高和普及統一的問題。”（「いまや、『陽春白雪』と『下里巴人』の統一、向上と普及の統一が問題なのです。」）日本語訳は竹内好訳「文芸講和」、小野川秀美責任編集『世界の名著64　孫文・毛沢東』中央公論社、1969年所収）と述べて、文学・芸術活動のあるべき姿を説く際に用いている。

さて、この四字熟語自体を巡ってだいぶ長くなってしまったが、この言葉が河南と関係があるのは、春秋時代晋国の大音楽家で「楽聖」とも称される師曠が当時の衛国の辺境の小都市・儀邑（現在の開封市）で「陽春」と「白雪」を作曲したからである。師曠が気に入っていた場所は、師曠が楽曲を吹き奏でていたことから「吹台」と呼ばれるようになり、開封市の禹王台公園内にある。明代になって、大禹治水を顕彰するため、禹王台と名前は変わったが、近年、園内にその塑像が設置されるなど、人々の師曠を慕う気持ちに変わりはない。私は2005年9月に初めて開封を訪れた際、行ったきりであるが（9月11日）、当時はその奥深い意味を理解しないまま「古吹台」と書かれた門を写真に収めてきた。

なお、「陽春白雪」が実際にどのような楽曲か。たとえば、中国の無料オンライン動画サイト「西瓜視頻」上では、現在米国を拠点に国際的に活躍している琵琶宣伝大使・呉蛮による演奏を聴くことができる（2020年12月6日確認）。ただし、これが師曠の作った曲であるかは、私には勉強不足でまだわからない。

今回の最後に**鶏鳴狗盗**に触れることにしたい。この四字熟語は、取るに足らない技能、あるいはそうした技能を持つ人を指す。また、とくに、こそこそとした不正行為を意味する。出典は『史記・孟嘗君列伝』である。戦国四君と称され、「合従」の立役者であった斉の宰相・孟嘗君は、斉湣王25年（紀元前298年）、周囲の猛反対を押し切って、秦に使者として出かける。秦の昭王は当初、孟嘗君を重用しようと考えるが、人の忠言を受け、逆に監禁して殺してしまおうとする。孟嘗君は昭王の寵妾に何とか取り成しを頼もうとするが、彼女がほしがっている白キツネの皮衣はすでに昭王に献上済みであった。しかし、配下の食客が夜中に犬に変装して、その皮衣を盗み出してくれ、そのおかげで、孟嘗君はとりあえず釈放された。急いで逃げ帰ろうとするが夜半に函谷関まで来ると、鶏が鳴くまでは誰も通すことはできないとのきまりである。ここで、また別の食客が、鶏の鳴き声を真似ると、本物の鶏も一斉に鳴き出し、函谷関が開いて孟嘗君は無事、斉に戻ることができたという故事である。

「古吹台」　（2005年9月撮影）

そのことから、この四字熟語は『熟語辞典』にあるように、取るに足らない技能（あるいは、そうした技能しか持たない人）でも使いようによって役立つという意味になった。また、日ごろからそのような通常は役にたたない技能の持ち主も含む幅広い人材を近くに置いていた孟嘗君を賞賛する意味も持つようである。

函谷関の史跡は河南省三門峡市霊宝市函谷関鎮王垛村にある。私はまだ実際に見に行ったことはないが、この関は、古来、関中と中原を隔てる要衝として、中国史のさまざまな場面に登場する。2500年ほど前、老子が『道徳経』を書いたのも、函谷関に滞在中とのこと。今回の雑感の宿題として、ぜひ、行ってみなくては思っている。

中国の面白い神話・伝奇物語(3)

顧 傑

■「唐伝奇」とは

前回までキョンシーの話を紹介させていただきましたが、如何でしたか？

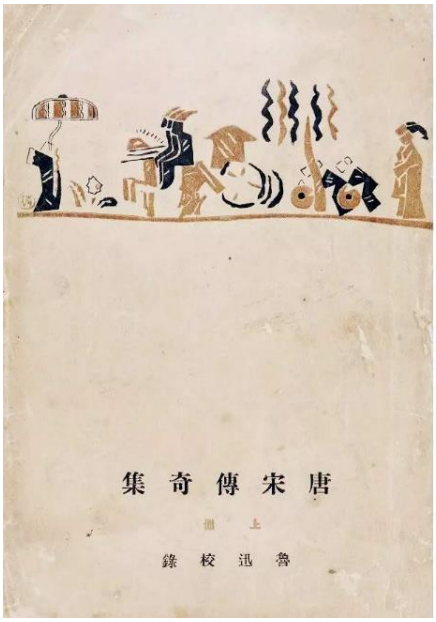
中国の面白い神話物語はまた機会を見てご紹介しますが、今月は神話同様に面白い「唐伝奇」の中からお話をしてみたいと思います。

芥川龍之介の短編小説「杜子春」をご存じの方も多いでしょう。お察しの通り、「杜子春」もまた、「唐伝奇」の物語「杜子春」をもとに書かれた小説です。

芥川龍之介は、1927 年 2 月 3 日付河西信三宛書簡で「唐の小説『杜子春傳』の主人公を用ひをり候へども、話は３分の２以上創作に有之候」と書いています。

さて、「唐伝奇」とはどんなものでしょうか？

「唐伝奇」は、中国六朝時代の影響を受けて、唐代になってから文人が書き始めた小説で、盛唐・中唐期を最盛期として、宋代には衰退したので、「唐代伝奇」とも「唐宋伝奇」と呼ばれています。



魯迅編集，陶元慶画「唐宋傳奇集」1927 年、上巻表紙（捜狐から）

先にも言いましたが、「ｓ」は小説形式の一つです。「伝奇」の「伝」は、「伝説」、「小説」といった意味で、「奇」は「奇怪」の意味を指しています。つまり、唐代に出来上がった、神仙妖怪や奇聞記事など架空の物語を内容にした短編小説といえるでしょう。

実際、「唐伝奇」の特徴というとかなり曖昧で、一部の学者は、「伝奇」が清朝まで存在していたと主張しています。しかし、筆者は「唐伝奇」は「唐から宋代に書かれた短編小説」と認識しており、この文章もその旨をベースにしています。

■「唐伝奇」の発展

中国の唐朝はかなり開放的な政策や、先進な仕官制度、またあの年代においては世界最先端の経済制度が確立していたので、高度な文化の花が咲き、百花繚乱の時代となりました。

唐高宗と則天武后統治の時期から「唐伝奇」の記載が見られていました。ただこの時期では内容がまだ貧しく、前代の志怪小説（注：妖怪・神仙などをテーマにする小説）の影響が大きくみられています。

その中では、『補江総白猿伝』に登場する白猿のイメージは、あの「西遊記」の孫悟空のモチーフになっているといわれています。

盛唐～中唐時期になって「唐伝奇」は、さまざまな作品が泉のように湧いてきました。元の時代に改編され、今でも中国の漫才「相声」や地方劇の舞台上に大きなネタとして受け継がれてきた「鶯鶯伝」（原作者・元稹）や、白居易の「長恨歌」にまつわる物語「長恨歌伝」（原作者・陳鴻）、中国映画史上名高い「倩女幽魂」の原作・「離魂記」など現代にもさまざまに影響を与えています。この時期の「唐伝奇」は、恋愛・歴史・皮肉や風刺などの物語のメイン・テーマになっていました。

あのように盛大になった唐朝も、内部からも外部からも問題が噴出、唐朝の統治はボロボロになっていきました。現実に失望した文化人たちは再び神仙・妖怪にテーマを拾い、物語を借りて歴史や政治を批判したり夢を見たりして、大いなる力を借りて再び繁栄や幸せを手に入れるなどの作品が多くみられています。

例えば近年中国で映画化された伝説刺客「聶隠娘伝」（原作者・裴鉶）1997 年に作られた実写ドラマ「崑崙奴」などもこの時代の作品です。

宋朝になってからは、国の政策が委縮し、「徳」の教育が重視され、それまでの自由闊達な文化的雰囲気がなくなりました。加えて唐の文語体の勢いが弱くなっており、文語体が多用される「唐伝奇」もそれと共に消えていきました。元朝になって、「唐伝奇」をモチーフにした小説がいくつか長編に改編されましたが、ジャンルとしての「唐伝奇」に数えるかどうは微妙ですね。

■「唐伝奇」の影響とこれからの物語について

「唐伝奇」は宋代に衰微しましたが、後世には多大な影響を与えています：

前にも多少書きましたが、中国の小説や伝統的な演劇である戏曲（京劇や昆曲などの地方劇を含め、歌・せりふ・踊り・立ち回りなどから成る演劇）に大きな影響を与えました。演劇の筋立てばかりでなく、道具立てや、状況にも「唐伝奇」から借りてきたものが多いのです。

例えば

「聶隠娘伝」に出てくる、人の死体を融化させる薬は、中国武侠小説家金庸の作品「鹿鼎記」にも重要な道具立てとして使われています。

「聶隠娘伝」の主人公聶隠娘が、仙法によって虫になりご主人を守るくだりは、「西遊記」で孫悟空が師を守るところに似ています。

また、「聶隠娘伝」の聶隠娘は、全身墨染めの黒装束を身にまとい、短剣・暗器などを使い要人の保護・暗殺などを行います。日本の忍者にも多少似ているかもしれませんね。上の写真は映画「黒衣の刺客（聶隠娘伝）」英語版ポスターです。

映画「黒衣の刺客」（2015 年台湾・中国・香港合作、中国名「刺客聶隠娘」）の英語版「ASSASSIN」のポスター（豆瓣電影から）

では、次回は、この「聶隠娘伝」の話をさせていただきましょうか。

～～～～～～～～～～～～

★日中友好会館からのご案内です。興味のある方はぜひお出かけください。

▶日中友好会館の催し◀

四川省で見つけた線が織りなす美しい手仕事

https://www.jcfc.or.jp/blog/archives/17390

＊期間：日中友好会館美術館
＊場所：1 月 28（木）～2 月 21 日（日）
＊時間：10 時～17 時（金曜は～20 時）
＊月曜休館　＊入館無料
＊展示内容：成都銀糸工芸・蜀錦・道明竹工芸・閬中シルク絨毯

～～～～～～～～～～

＃＃ イベント ＃＃

1. **竹細エワークショップ**　事前申込制
   2 月 6 日(土)14:00～16:00　定員 10 名
   材料費＝1000 円
2. **変面ショー＆琵琶演奏会**　事前申込
   2 月 10 日（水）14：00～14：40
   25 席参加無料

●申込み/問い合わせ： ☎ 03-3815-5085
e-mail:bunka@jcfc.or.jp

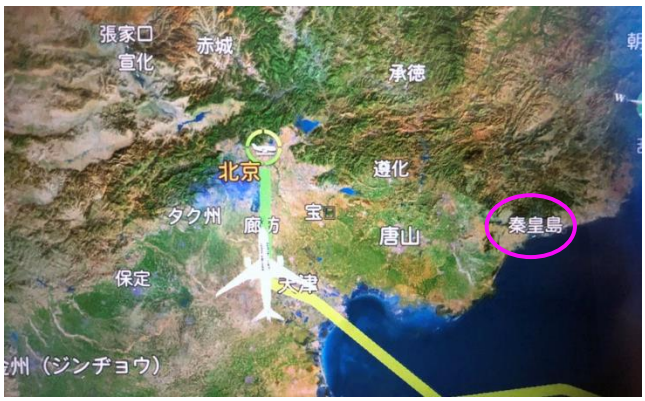
「秦皇島（しんこうとう）」をご存じですか？……(1)

文と写真　吉光　清

海南島や青島はご存知でも「秦皇島」と聞いて「そんな島どこにあるの？」と思われる方が多いのではないだろうか。かく言う筆者も現地を訪ねる直前までは聞いたことも無い地名だった。それなのに 2015 年から 2018 年までの４年間に、短くて数日間、長くて２か月半、団体旅行もしくは単独訪問で、業務で或いは私用でと、形はいろいろだったが、都合、５回の往復を重ねることになった。それぞれの滞在の中で暇を見て観光スポットを訪れ歩き回ったが、それらの見聞は断片的になってしまったので一編の紀行文にするには無理がある。そこで見聞の内容を整理し、資料で肉づけして、気ままに旅行するための現地案内を試みることにした。筆者の中文力は初級者以前の状態だったが、知人や現地の方々の助けが得られ、ドキドキしながらも楽しく往復し滞在した。ここに感謝の気持ちを表しておきたい。西太后で有名な頤和園の入り口で手渡された旅行業者のパンフレットには「五线：北戴河二日游 300 元/位全包」として、北京から１泊２日バスツアーの募集広告が載っていた。コロナ下（禍）で中国旅行に出掛ける目処も立ち難いこの頃だが、北京旅行の際は是非一足延ばすことをお勧めしたい。

■「秦皇島」と「河北省」

北京空港に近づいた国際便の機内では、各座席前のディスプレイ画面に下の写真のような飛行ルート図が示される。「秦皇島」という表記は北京からほぼ真東に向かって進み渤海湾に到達したところにある地級市（省と県の間に位置する行政単位）」を意味している。緯度をさらに東に辿ると遼東半島の大連の北方を越え、朝鮮半島の平壌の少し北を通り、能登半島を越えて上越市と柏崎市の中間あたりに達する。大陸性気候で暑さ寒さが厳しい北京などに比べると温暖であり、在留外国人、政府要人たちが北京の酷暑を避ける避暑地として利用されてきたようである。飛行ルート図には同時に承徳、張家口、保定、廊坊、唐山、天津などの地名が見えている。西に太行山脈、北に燕山山脈に接して広がり、北京や天津といった直轄市を取り巻く、この広大な地域が黄河の北を意味する河北省であり、漢民族が北に拡大しつつ歴代の王朝が覇権争いを繰り広げた華北平原（中原）の北限をなしている。中国政府発行の「中国河北観光図」は主な景勝地として、承徳市の「避暑山荘」、「外八廟」と「木蘭囲場」、唐山市の「清の東陵」、保定市の「清の西陵」、秦皇島市の「北戴河」を挙げている。



機内液晶画面の飛行ルート図。秦皇島と河北省（2018 年 6 月）

秦皇島市は東部を遼寧省と接しており、この境界の地には明代の初期に長城の防御のために山海関城が建設された。険しい山岳地帯を避けて海岸沿いに侵入してくる異民族を撃退するための戦略上の要衝であったことが地形から一目瞭然である。実際に、明代末に瀋陽に都を置いた後金=清は、山海関の守将の投降で初めて中原への進出を果たし、清朝の樹立に繋がったのである。秦皇島市が存在する場所は、古代の殷・周時代から春秋時代までは「孤竹国」の一部であったが、その後「斉」、そして「燕」に併合された。戦国時代、この地にあった燕の皇太子が、強大になりつつあった秦の始皇帝を暗殺しようと、刺客を放って失敗した故事は有名で、漢詩の題材や能の演目などにもなっている。

■「秦皇島市」の由来と市制の変遷

清朝政府は 1898 年（光緒 23 年）ここに港を開き「秦皇島港」と名付けたが、その当時、「秦皇島」が実在していたかどうか筆者には定かではない。清朝は又鉄道を整備し、山西省や内蒙古など内陸からの石炭を集積することで、世界最大規模の石炭取り扱い港を作り上げた。天津と臨榆を結ぶ鉄道も開通し、河北の物資を積み出し、渤海湾を通って輸出する物流の拠点となった。

一方で北戴河地区は「中外雑居」の避暑地として公認され、他国からの観光客も滞在できるリゾート地として開発が進められ、現在は中国共産党幹部の避暑地としても（「北戴河会議」が有名）利用されている。

中華人民共和国政府は1949年に４つの区からなる秦皇島市を設置した。秦の始皇帝が燕を討伐するため、この地に赴いたとする「秦皇求仙入海処」などの遺跡が存在し、秦皇島港を擁する地として「秦皇島」を市の名称に採用したのは自然の成り行きだったであろう。その後、隣接する唐山市の一部や山海関市の編入を経て、1983 年には４市轄区、４県を管轄する地級市に昇格した。2015 年には４つの市轄区（海港区、山海閑区、北戴河区、撫寧区）と２つの県（昌黎県、盧竜県）、および青竜満州族自治県を管轄下に置くことになり、面積は7812.4平方キロメートル、人口307.32万人（2017年）になった。秦皇島港は、現在も原油・石油などのエネルギー資源を海外に積み出す中国最大の輸出港である。

４つの市轄区はそれぞれの特徴がはっきりしている。山海関区は市の東端にあり、世界遺産に登録された「山海関（老龍頭と天下第一関）」や「角山長城」などの史跡を持つことで名高い。海港区は行政の中心、かつ秦皇島港を擁するビジネスの中心として高層ビルが立ち並び、人口集中が進んでいる。カルフール（フランス資本のスーパーマーケット）の店舗が入った商業ビルや５つ星のホテルなども見られる。北戴河区には高級リゾート地として、長期滞在用のリゾートホテルや各種の保養施設、観光客目当ての飲食店が立ち並ぶ一角がある。観光施設や公園も整備され、全体的に落ち着いた雰囲気を持っている。中心地域にあるバスステーションでは北戴河駅や秦皇島駅と結ぶ市内バスがひっきり無しに発着している。後発の撫寧区は少し奥地にあり、農業や鉱業中心の地域と推測される。先日、日本のＴＶ番組で秦皇島市が取り上げられたものを偶然に視聴した。化学製品を生産する工場が有害物質を拡散させ、被害を受けた人々が住民運動を起こし、地方政府や工場に対して公害を認めさせ、補償を勝ち取ったという内容だったが、旅行者としては窺い知ることは出来なかった、秦皇島市が抱える問題を教えられた。

■秦皇島へのアクセス

秦皇島市内には北京とハルビンを結ぶ鉄道京哈線が通過する。秦皇島港と韓国の仁川港を結ぶ国際定期航路があり、秦皇島空港には上海、深圳、福州などの国内主要都市との間を結ぶ路線がある。したがって日本から飛行機を乗り継いで秦皇島に着くことも可能であるが、便数が少なく、日本を出発して秦皇島到着は翌日になる可能性が高い。地図上で目にする「北戴河空港」や「山海関空港」の情報は得ていない。

高鉄（中国の新幹線）の利用は最も便利で経済的な手段である。秦皇島市内に高鉄が停車する駅として北戴河駅（北京駅から２時間少々）、秦皇島駅、山海関駅がある。ただし北京空港に降りても北京駅に移動し、駅の窓口で高鉄の乗車券を購入しなければならない。日本を出発する前に高鉄の座席を手配することは可能だが、空港到着に遅延が生じた場合の処理と乗車券の新規購入は厄介である。そこで無難なのは北京観光をしてから数日後に余裕を持って乗車券を入手し、乗車することである。

北戴河駅の駅前はロシア風の建物が並び、落ち着いた雰囲気を醸し出しているが、観光目的の宿泊にはあまり適していない。山海関駅で下車した場合は天下第一関や老龍頭には遠くないが、その後の観光を考えると宿泊のメリットは少ない。結局、秦皇島駅周辺で宿泊するか、北戴河区の市街地に移動して宿泊することが現実的である。秦皇島駅前は再開発で工事中だが、駅前にはリーズナブルなホテルや商業施設が並び、裏通りには国内旅行者向けの安宿や露店が並ぶ一角も残っていて生活の匂いがあった。

勿論、可能ならばパーキングエリアで休憩しながら京哈高速公路を利用して乗用車で秦皇島に着ければ旅の自由度は高くなる。ただし北京市内を出るまでの渋滞と高速道路上で何らかの原因による渋滞に出会う可能性は低くないので、５時間程度を見込むのが賢明である。

筆者が知人から教えられた、単独で北京から秦皇島に移動する最善の方法は、北京空港から秦皇島行き長距離バスに乗ることである。北京市内の長距離バスステーションからも秦皇島行きのバスは出ているが、中国語会話不可、地理不案内である筆者の場合は、空港で

乗車すれば黙っていても秦皇島に着けて、荷物の心配をすることも無い、空港からの直行便には大いなるメリットがあった。ただし、便数が少ないので北京空港に着いた当日の利用は難しい。空港近くのホテルに宿泊し、翌朝、空港への送迎バスで空港に戻り午前のバス乗車が筆者の常套手段であった。

■長城が海に潜る「老龍頭」と「天下第一関」

秦皇島観光の第一歩としては、やはり老龍頭と天下第一関を訪れたい。海港区から龍海大道を海岸線に沿って北上すると山海関区に入り、燕塞湖を水源とする大石河を渡ると間もなく老龍頭景区に至る。その先を少し進むとそこはもう遼寧省になる。

老龍頭と天下第一関は山海関駅を利用する方法もあるが両方を徒歩というのは難儀である。車で訪れ、一時に観光する方が得策である。万里の長城は巨大な龍に例えられるが、その「龍の頭」はここ山海関にある。チケットを買って城内に入ると「AAAAA 国家級旅游景区」のプレートがある。衛兵の服装をした立像や復元された兵舎などの間を通るが、往時を想像させる「お尋ね者の手配書き」が貼られていたのは傑作だった。二層建築の「澄海楼」を抜けると急に目の前が開け、青い海原を背にした老龍頭が現れる。海に突き出した長城に立つと船の舳先（龍の頭上）に立っているような気になる。砂浜に降りて横から見ると、あたかも龍が海上を進み海中に消えて行くような風情も感じられる（下写真参照）。燕の時代以降、長城は遼東半島にまで延びていたが、明代は後金の侵攻を受け、山海関まで防衛線を下げたので、ここが長城の東端に位置付けられることになった。現在の「龍のしっぽの先」は甘粛省の「嘉峪関」（山海関・八達嶺とともに、世界遺産に登録された三地点の一つ）にある。中国政府は長城東端を遼寧省内に認定し 2012 年には「秦」、「漢」などの時代の長城も含めた総延長を 21,196.18 キロメートルになると発表した。

海に入る万里の長城（2015 年 9 月）

「山海関」所縁の三人（2015 年 9 月）

「第一関」の名称は「東端から数えて１番目の関所」を意味し、城門に大きな扁額が掲げられている。四角形の城内を囲む城壁は高さ 14 メートル、壁の厚さは７メートル、城壁上には牧営楼、威遠堂などの城楼、東、南、北側には堀が作られ、堅固な要塞だったことが窺える。駐車場から城内に入る道の両側には土産物などを売る露店が並んでいたが、小路を抜けて歩くところもあり、人々の生活が垣間見えて興味深かった。短い距離ながら、人を乗せられるように荷台を取り付けた三輪車が観光客を運んでいた。その終点から入場料を支払って城内に入るが、城内に入らなくても「天下第一関」の扁額を背景に記念写真が撮れるスポットがあった。そこに撮影モデル用と思われる駱駝が居たので一瞬首を傾げた。しかし、「遥かに長城が連なる彼方はシルクロードなんだもんネ」と納得した。駐車場に戻る道の傍らに３人の人物の塑像が立っていた（上の写真参照）。台座には「臺将」と彫られていたが、各人が誰なのかを確かめず終いになった。山海関に所縁の深い３人は誰なのか。服装を見ると中央の人物は北京を攻略した清の「世祖（順治帝）」か？ 左右の人物は、ヌルハチやホンタイジによる度重なる攻撃から山海関を守り抜いた名将「袁崇煥」と、開城し明滅亡後の混乱から「清」の統治に替わる契機を作った「呉三桂」だろうか？ ご存知の方にご教示頂ければ幸いである。城門の近くに、中国内では珍しく焼き餃子を出す食堂があった。美味しかったので店の外観を写真に撮った。　（続く）

今年も四姑娘山の大川さんから、わんりぃの皆様への年賀状をいただきました。ありがとうございます。

あんなことこんなこと 思い思いに

みんなの広場

◎12 月号の匿名氏に対するお答え　河野　公雄

259 号「みんなの広場」にお便りをくださった匿名氏さん、私が投稿している「中日辞典からの意外な発見」に興味をもっていただき、ありがとうございます。中国語の勉強をもうちょっと続けてみようかな…とのお言葉を聞き、とても嬉しく思います。“わんりぃ”の新年会で手品をやった河野は私です。

253 号と 255 号の投稿の内容について少し補足をしたいと思います。

253 号：「無気音」とは？……左表をご覧ください。中国語の子音は 21 個あります。そのうち 6 個が「有気音」です。残りの 15 個は確かに「息が出ないか息がおさえ気味の音」ですが、すべてが「無気音」とは呼ばれないようです。「無気音」とは「有気音」に対応する 6 個と考えたほうがよいでしょう。

255 号：「-n」と「-ン」の対応関係について……「定」をつくりとする漢字は“dìng”派と“diàn”派とがあります。“dìng”派：「碇・啶・錠・腚」、“diàn”派：「淀・靛」。ことばの法則は、人々が書いたり話したりするときの使い方を整理して体系化したものですから、例外はつきものです。それだからこそ、ことばというものは奥深く、興味深いものになるのではないでしょうか。

発音方法と調音場所による中国語の子音の分類（相原茂編著「中国語学習ハンドブック」による）

調音場所 ＼ 発音方法			破裂音		鼻音	破擦音		摩擦音		側面音
			無声 **無気**	無声 有気	有声	無声 **無気**	無声 有気	無声	有声	有声
唇音	両唇音	上下の唇	**b(o)**	p(o)	m(o)					
唇音	唇歯音	上歯と下唇						f(o)		
舌尖音		歯ぐきと舌尖	**d(e)**	t(e)	n(e)					l(e)
舌根音		軟口蓋と舌面後部	**g(e)**	k(e)				h(e)		
舌面音		硬口蓋と舌面前部				**j(i)**	q(i)	x(i)		
捲舌音		硬口蓋前部と舌尖				**zh(i)**	ch(i)	sh(i)	r(i)	
舌歯音		上歯の裏と舌端				**z(i)**	c(i)	s(i)		

【わんりぃの催し】

☆☆今年の新年会は中止です☆☆

わんりぃ恒例の新年会、今年は中止します。大変残念ですが、この状況下では無理なようです。2022 年に、2 年分を楽しみましょう !!

・➢・➢・➢・➢・➢・

♫ ボイス･トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター !!
＊動きやすい服装でご参加ください。

- **会場**：まちだ中央公民館・視聴覚室
- **日時**： 1 月 19 日（火）10：00～11：30
  2 月 16 日（火）10：00～11：30
- **講師**：Emme［エメ］（歌手）
- **会費**：1,500 円（講師謝礼・会場費）
- **定員**：15 名（原則として）
- **申込**：☎042-735-7187（鈴木）

～～～～～～～～～

❀❀ 中国語で読む 漢詩の会 ❀❀

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！
録音機をお持ちの方はご持参ください。

- **会場**：まちだ中央公民館・視聴覚室
- **日時**：1 月 17 日（日）10:00～11:30
  2 月 14 日（日）10:00～11:30
- **講師**：植田渥雄先生
  桜美林大学名誉教授
  現桜美林大学孔子学院講師
- **会費**：1,500 円（会場費・講師謝礼）
- **定員**：20 名（原則として）
- **申込**：☎090-1425-0472（寺西）
  Email:ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp
  （有為楠）

■ 1 月・2 月定例会

▼1 月 12 日(火) 13:30～
▼2 月 4 日(木) 13:30～
三輪センター 第三会議室

■ ‘わんりぃ’ 発送

▼‘わんりぃ’2 月はお休みです。
▼ 3 月号の発送
2 月 28 日(月)10:00～
三輪センター 第二会議室

―― 編 集 後 記 ――

明けましておめでとうございます。

世の中的には、コロナに始まりコロナで終わった 2020 年でしたが、皆様にとってはどんな一年でしたか？ 多かれ少なかれ、コロナウイルスの影響を受けたのではないでしょうか。

昨年のコロナ騒動で、少し印象が薄れていますが、ここ数年、地球は異常気象に悩まされています。日本でも、記録的豪雨や超大型台風に見舞われ、各地で水害や土砂災害が多発しています。夏の異常高温にも悩まされました。最近は 12 月の豪雪です。またプラスチックごみによる海洋汚染によって、海の生態系が大きく損なわれています。これらは、私たちが追い求めた「便利な生活」のつけが回って来たものだと考えられ、地球への負担を減らす運動が世界的に展開されるようになって来ました。

新しい年は、「With コロナの生活」と同時に、「脱炭素社会」と「脱プラスチック」も考えた「新しい生活」を考える年にしたいものです。

～・～・～・～・～・～

‘わんりぃ’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800 円、入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりぃ
10 月以降の入会は、当年会費 1000 円。
■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりぃ’260 号の主な目次

寺子屋· 四字成語(39)后来居上……2
「日译诗词」(９)『詩経』国風・関雎……3
「漢詩の会」だより 44 国主李煜……5
丑年にちなむ諺・ことば……8
中国の歴史を彩る美人百花（6）……9
「中原」雑感（9）四字熟語に見える河南…11
中国の面白い神話・伝奇物語（3）……14
秦皇島をご存じですか……16
四姑娘・大川さん年賀状……19
「みんなの広場」……19
‘わんりぃ’の催し・入会案内……20